滋賀県西部の農村集落における昭和前期の子どもの遊びを通した自然資源と空間の利用

Early Showa Period Use of Natural Resources and Natural Space in Child Play in a Rural Community in the Western Part of Shiga Prefecture, Japan

堀内 美緒* 深町加津枝** 奥 敬一*** 岡田加奈子****

Mio HORIUCHI Katsue FUKAMACHI Hirokazu OKU Kanako OKADA

Abstract : This study investigated how children used natural space and natural resources for play in satoyama cultural landscapes in the early Showa period. The site of the investigation was Moriyama Village, a rural community today part of Otsu City in Shiga Prefecture, where villagers who were elementary school children in the period between 1925 and 1955 were interviewed. The investigation showed that 72 main kinds of play used to be played. Among these, 69 were plays that took place outdoors or in which natural resources were used. 42 kinds of play dealt with collecting flowers and animals in the village. Tools that were used in the plays included many natural resources such as bamboo, flowers and the fruits of various plants. Through child play, children got into contact with various natural spaces such as the mountains, the river and the lake.

Keywords: *satoyama, rural community, nature play, play space, natural resources*

キーワード: 里山, 農村, 自然遊び, 遊び空間, 自然資源

1. はじめに

近年, 里山と呼ばれるようになった日本の農村における山林や小川, 水田などの多様な二次的な自然環境は, 地域の生業・生活だけでなく, 豊かな子どもの遊びを支える環境であったといえる。子ども時代の遊び環境は, 大人の中に原風景として刻まれる¹⁾と言われ, 子ども時代の遊びの頻度の高さが, 地域に対する愛着に関係し, さらに地域活動に対する意欲を左右することが明らかにされている²⁾。身近な自然空間の保全・活用においても, 自然遊びが自然空間の認識に影響をしていることが明らかにされ^{3), 4)}, 子どもの自然遊びと緑地に関する研究が行われた⁵⁾。また, 里山を利活用するときに基礎となる動植物の認識を身に付けるうえでも, 子ども時代の遊びの中での自然体験が重要であることも示されるようになった^{6)~8)}。

最近では, 子どもの遊びから過去の自然・社会環境条件を復元し, 里山の保全・活用の基本的な情報を把握する研究も行われるようになった^{9), 10)}。寺内ら¹⁰⁾の研究では, 微地形や土地被覆, 仲間などから遊びの環境条件の分析が行われ, 里山のような二次的な自然環境を遊び場所として再活用していく重要性が指摘された。このような遊びで利用されてきた自然環境は環境教育などのプログラムの中に組み込むことが求められている。しかし, 里山の保全にむけた中で, 遊びのもつ認識機能に関する研究の蓄積に対して, 遊びを支えていた自然環境の実態の把握は蓄積がまだ少ないといえる。

建築学を中心とした空間計画系研究¹¹⁾で蓄積されてきた子どもの遊び環境に関する既往研究をみても, 都市の遊び環境に比べて農村を扱った研究はまだ少ない^{12), 13)}。特に, 農村を構成する二次的な自然全体をみたときの遊び空間の分布, 二次的な自然環境を構成する空間の質的な部分や, その自然資源との関係はきちんと把握されていない。

本研究は, 子どもの遊びの中でかつて利用されていた空間と自

然資源の種類や分布を通して, 里山がいかに多様な子供と自然との関わり方や, 関わり方を覚える場を形成してきたのかを明らかにすることを目的とする。また, そこから, そうした遊びを支えた空間や自然資源はどういうものであったのかを考察する。

本研究の対象年代は, 一般的に燃料革命によって里山における自然資源の利用が大きく変化したといわれる昭和30年代より以前で, 地域社会や自然とのつながりの中で遊んだ体験をもつ年配者からの聞き取りが可能な, 昭和初めから30年代までの昭和前期とする。また, 本研究では, 地域の空間と資源を自分の意思や行動力で遊びに利用できるようになり, かつ家庭や社会に対する責任や義務が比較的少なく, 遊びに割ける時間が長い年代として, 6~12歳の小学生時期における遊びを対象に設定した。

2. 方法

(1) 研究対象地の設定

(i) 対象地の概要

研究対象地は, 滋賀県大津市八屋戸地区の守山集落である。平成18年に合併により大津市へ編入される以前は, 志賀町に属していた。昭和40年代以降, 京阪神の通勤圏として新興住宅地の開発が進んだが, 伝統的な家並みや伝統行事が今でも残っている。

守山集落は, 琵琶湖の西岸で, 1,000m級の比良山地の東側の山麓に位置する。集落面積は約360haで, 比良山地から琵琶湖に流れる2つの河川に挟まれている。比良山地の山頂付近にはブナ林やミズナラ林が広がり, 山麓にはアカマツ林や, クヌギやコナラを中心とする雑木林が点在している。周辺の湖岸には, 沖合を南から北へと流れる還流に乗って四季折々のさまざまな魚類が来遊する。このように, この地域には遊び空間の対象となる湖や川などの水辺, 水田や山林などの二次的な自然, 神社や路地など多様な要素を含む典型的な里山の景観を呈する農村集落である。また, 近年では里山の空間や資源を環境教育やレクリエーションの

*国連大学高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット **京都大学大学院地球環境学

*** (独) 森林総合研究所関西支所 ****元京都府立大学

中で利活用していく市民活動が地域に根ざした形で展開している¹⁴⁾。滋賀県では、琵琶湖を中心とした水辺の遊びを対象に生物相の時代変遷と意識変化とした研究が行われている¹⁵⁾が、水辺以外も含む農村集落全体での遊び研究はまだ蓄積が少ない。

(ii) 昭和前期の守山集落の子どもの生活

昭和前期の守山集落の人口は約400人、世帯数は約70戸であった。集落内の小学生の同級生は、一学年で約10人だった。昭和前期の守山集落の子どもたちは、小学1、2年生の時は集落内にある分校に通い、小学3年生になると2kmほど離れた北隣の木戸集落にある木戸小学校に通っていた。

この時代は、薪炭を燃料とする生活や、草などの有機肥料を利用した農業が行われていた¹⁶⁾。小学生の子どもたちも、学校に行きながら田んぼ仕事や家畜の世話などの手伝いをする生活を送っていた。さらに戦争の影響による開墾や食糧増産など、自然資源を最大限に利用する生活が行われていた¹⁷⁾。聞き取り調査によると、この時代の女子は家事の手伝いや下のきょうだいの子守があり、遊びの中でも食料となるものを採集することが期待されていた。それに比べると男子は、比較的自由に遊ぶことが許されていた。そのため、本研究では男女の違いに注意して分析を行った。

(2) 聞き取り調査

昭和前期の子どもの遊びを把握するために、聞き取り調査を行った。対象者は、守山集落で生まれ、昭和前期に小学生だった守山集落在住の男女とした。平成19年9月～平成20年8月にかけて、大正14～昭和23年生まれの男性8名、昭和2～17年生まれの女性6名、合わせて14名に面接形式での聞き取りを行った。1人あたり1回にかけた時間は1～2時間で、さらに内容の確認のために1人に対して2、3回の調査を行った。

質問項目は、遊びの名前、遊びの内容、遊びの場所、遊びの季節、遊びに用いた道具、採集した動植物、とした。また、志賀町1万分の1地形図（志賀町発行、平成3年測図、平成9年一部修正）を用いて、対象者の家の場所、遊んだ場所を地形図上で示してもらい、地理的な情報を把握した。同時に、遊んだ場所の当時の様子や、現代の同地域での一般的な遊び方の傾向についても聞き取りを行った。

(3) 分析方法

本研究では自然遊びを、地域の屋外空間や自然資源を利用した遊び、と定義する。その上で、本研究に近い時期の都市近郊を対象に、遊びを支えた環境条件に着目した寺内ら¹⁰⁾による遊びの分類を参考に、「植物遊び」「動物遊び」「人との遊び」「ものとの遊び」「冒険遊び」「身体動作遊び」の6つのタイプに分類した（図-1）。さらに、遊びの中で行われていた動植物などの自然資源の利用に着目するため、山田・田畑³⁾の先行研究における動植物を使った遊びの分類に基づき、「植物遊び」を「採集そのものの遊び」「採集物を使った遊び」「採集物を加工した遊び」「採集以外」

図-1 自然遊びの分類

に分類した。「動物遊び」は、「採集そのものの遊び」「採集物を使った遊び」に分類した。遊んだ場所の地理的な情報に関しては、土地利用や土地被覆の状態から遊び空間を「山」「川」「湖」「道路」「神社」「運動場」「田」「庭」の要素に分類した。そして、遊び空間と遊びタイプ、季節との関係を分析した。さらに、聞き取り調査の際に用いた志賀町1万分の1地形図をベースマップとしてArcGIS（Ver.9.2）に取り込み、聞き取った情報と、国土地理院発行5万分の1地形図（昭和8年発行）の地図記号を参考にし、集落範囲における遊び空間の要素の分布を示した。その上で、対象者に示してもらった主な遊び空間の位置を、男子と女子で整理して示した。

最後に自然遊びと自然資源との関係を整理した。「遊び道具として利用されていた自然資源」と「遊びの対象として採集された動植物」の点から自然遊びの中で利用されていた自然資源の分析を行った。

3. 結果

(1) 昭和前期の自然遊びの特徴

昭和前期の守山集落の主な遊びとして72種類の遊びが挙げられた。そのうち地域の屋外空間や自然資源を利用した自然遊びは69種類であり、それ以外の遊びは、トランプ、かるた、百人一首の3種類のみであった。

69種類の自然遊びを遊びタイプごとに整理したものが表-1である。一番多かったタイプは「植物遊び」の24種類で、次に18種類の「動物遊び」が多かった。仲間が必要な「人との遊び」は16種類、道具があれば一人でも遊べる「ものとの遊び」は7種類であった。「冒険遊び」と「身体動作遊び」はともに2種類

表-1 昭和前期における守山集落の自然遊び

遊びタイプ	名称	男子 ⑧	女子 ⑥	遊びタイプ	名称	男子 ⑧	女子 ⑥
植物遊び (24)	採集そのものの遊び	キノコとり	8 6	動物遊び (18)	貝とり	8 6	
		イチゴとり	7 6		魚とり(手づかみ)	8 4	
		クリひろい	5 5		虫とり	8 1	
		イタドリとり	4 6		ホタルとり	4 5	
		木の葉とり	4 6		イナゴとり	3 4	
		ドンブリあつめ	4 6		コゲッチョ(小鳥とり)	6 0	
	採集物を使った遊び	アケビとり	3 3		ウナギとり	6 0	
		ヤブイチゴジュース	5 5		魚つり	5 1	
		ジャンジャン車(イタドリの水車)	3 4		ドジョウとり	5 1	
		花輪づくり	3 4		魚とり(仕掛け)	3 1	
		タンポポの茎の笛	2 4		魚とり(鉢づけ)	3 1	
		マツの緑のチューインガム	3 2		スズメとり	2 0	
		押し花	0 4		ハチの子とり	2 0	
		ツバキの花びらの飾り	0 3		ザリガニとり	2 0	
		花の髪飾り	0 2		魚とり(毒流し)	1 0	
		ダマ鉄砲	8 4		エビとり	0 1	
	採集物を加工した遊び	竹スキー	8 3		クワガタ遊び	6 0	
		竹馬	6 0		カブトムシ飛ばし	4 0	
		弓矢	6 0		ケンパ(石けり)	7 6	
		コンメ(お手玉)	0 6		かくれんぼ	7 4	
		ゴム銃	5 0		雪合戦	4 6	
	採集以外	竹とんぼ	5 0		缶けり	7 1	
		水鉄砲	3 1		イッチョ・ニチョ(石飛ばし)	3 5	
		木登り	6 0	人との遊び (16)	ビー玉	6 1	
ものとの遊び (7)	紙飛行機とばし	5 3			メンコ	6 1	
	縄とび	2 6			チャンバラ	6 0	
	風揚げ	5 1			野球	6 0	
	石のせ遊び	3 2			ドッジボール	3 3	
	コマ回し	3 2			釘さし	5 0	
	ブランコ	2 3			エスケン	4 0	
	まりつき	0 5			ハナイチモンメ	1 3	
冒険遊び (2)	コウモリ穴探検	8 0			ニクダン	3 0	
	隠れ家づくり	4 0			ママゴト	0 3	
身体動作遊び (2)	水泳	8 6			相撲	2 0	
	かりけこ	3 2

図-2 遊び空間と遊びタイプとの関係

であった。

「植物遊び」は、さらに採集そのものの遊びから、採集物を使ったり、さらに細工して遊んだりと多様な遊び形態があった。キノコ類やイチゴ、低木になる木の実、シイなどのドングリなど植物そのものを採集する遊びは、男女に共通して多く経験していた。一方、花輪づくりや押し花など採集物を使った遊びでは女子のほうが、竹スキーや竹馬など採集物をさらに細工して遊んだ経験は男子のほうが多かった。

「動物遊び」では、セタジミなどの貝やホタル、イナゴなどは男女に共通して採集して遊んだ経験があったが、小鳥やウナギなど男子のみにみられた遊びも多かった。採集した動物を使った遊びは2種類しかなく、これは採集したクワガタやカブトムシを飛ばしたり、戦わせたりした遊びであった。ともに男子のみの遊びであった。

また、「人との遊び」や「冒険遊び」は、チャンバラや野球、隠れ家づくりなど男子のみが経験のある遊びが多くみられた。

男女ともに全員が経験のある遊びは、キノコとり、水泳、貝とりであった。男子全員が経験していた遊びは、手づかみでの魚とりやクワガタなどの虫とり、竹を細工した遊びであるダマ鉄砲や竹スキー、コウモリ穴探検の遊びであった。一方、女子全員が経験していた遊びは、植物を採集する遊びであるイチゴやイタドリや木の実とりがあり、他には、お手玉、縄跳び、ケンパ、雪合戦であった。

「人との遊び」以外は一人でも可能な遊びであったが、どの遊びも共通して、集落内や同じ小学校に通う同年代の子どもやきょうだいと一緒に遊ぶことが普通であった。集落内でも家が近い子ども同士が遊び仲間となることが多かった。

(2) 遊び空間の特徴

(i) 遊び空間の種類

守山集落における子どもの遊び空間は、「山」「田」「川」「水路」「湖」「道路」「神社」「運動場」「庭」の9つの要素に分類できた。

「山」は、家が集まっている住宅地の周辺に広がる、クヌギやコナラを中心とした雑木林や、アカマツ林のことを指す。宅地から山林の入り口には、割木(薪)や柴、石材を集積するマキと呼ばれる場所があり、林道もここを起点に何本も通っていた。林道は、定期的に集落総出で手入れがされていた¹⁶⁾。この近くには、用水路として掘られたという伝承のある地下のトンネルもあり、コウモリ穴と呼ばれていた。

「田」は、水田とその周りの畦を指す。琵琶湖と家が集まる宅地部分に挟まれるように広がっていた。

「川」は、比良山地の谷から流れる二つの河川のことを指す。守山集落は、この二河川に南北をはさまれるように位置している。

図-3 遊び空間と季節の関係

び住宅地の中の道路のことを指す。昭和前期は、一日の車の交通量も少なく、格好の遊び場であった。「神社」は、守山集落の氏神とシイ林を中心とする神社林のことを指す。「運動場」は、守山集落にある分校の校庭のことである。「庭」は、家の周りの個人的な庭やそれを囲む防風林、住宅地の中にある空き地のことを示す。

このように昭和前期の守山集落には、山や水辺、道路といった公共空間など多様な空間が広がり、その中には、遊びに使える様々な要素が存在していた。

(ii) 遊び空間と遊びタイプの関係

9つに分類した遊び空間と自然遊びのタイプとの関係を示したものが図-2である。ただし、一つの遊びに対して、複数の遊び空間を利用していた場合もすべてカウントした。

一番、遊びの種類数が多かった遊び空間は「庭」であった。次に、「山」と「神社」で遊びの種類数が多かった。

また、動植物の遊びと、人との遊びという遊びのタイプの違いで、利用していた遊び空間にも違いがみられた。動植物の遊びは、「山」「田」「川」「水路」「湖」が多かった。特に「川」「水路」「湖」といった水系に関わる空間は動物遊びが多かった。人との遊びが多かったのは、「神社」「道路」「運動場」であった。「庭」は、動植物遊びと人の遊び両方で利用されていた。

(iii) 遊び空間と季節の関係

次に、遊び空間と季節との関係を示したものが、図-3である。一つの遊びが複数の空間を利用し、さらに複数の季節にまたがる場合もすべてをカウントした。「通年」は、季節に関係のない遊びのことである。

主に動植物の遊びとの関係がみられた「山」「田」では、四季それぞれで利用されていた。また、動物遊びが多い水系の空間「川」「水」「湖」では、夏に主に遊ぶことが多かった。動植物遊びと人の遊び両方で利用されていた「庭」では、四季それぞれの遊びとともに、季節に関係のない通年の遊びも多かった。また、人との遊びと関係の深い「神社」「道路」「運動場」では、季節の関係ない通年の遊びか、冬の遊びが主に行われていた。

(iv) 遊び空間の分布

動植物の遊びに利用され、季節とも関係の深い「山」「田」「川」「水路」「湖」の要素に着目し、それぞれの要素の集落における分布を示した上で、位置の特定できた男女それぞれの主な遊び空間を示したものが図-4、5である。図-4の各数字の位置に対応する男子の主な遊び空間と遊びの内容、そこでの遊びの経験のある人数を表-2に示し、図-5の女子の内容は表-3に示した。

昭和前期の守山集落における子どもの遊び空間は、家のある場所を中心に、湖岸から標高200mくらいまでの山を範囲としてい

川には、比良山地からの礫や石が多く、農用水として水路に分水する時期には水が少なかった。「水路」は、川から分水した農業用水路および、湧水による小さな川を指す。その多くは集落でとれる守山石を利用した石積み水路であった。「湖」は、湖岸の砂礫浜と湖水のことを指す。守山集落の湖岸には湖東へ割木や石材などを運搬するため、シマと呼ばれる舟着場があった。入り江になっていたが、昭和40年頃に埋め立てられた。

「道路」は、集落内の西近江路(現在の県道558号)、およ

図－４ 昭和前期の男子の主な遊び空間の分布

た。標高300m以上の山になると、大人についてクリひろいに行くことはあったという。また、特に「山」の遊び空間では、女子のほうは家のある場所の周辺にかたまって分布しているのに対して、男子のほうは数も多く、範囲も広がった。聞き取り調査から得られた理由としては、女子は下のきょうだいの世話や家の手伝いをせねばならず、遊ぶ時間も限られていたことがあげられた。

「山」の遊び空間の位置は、クワガタなどの虫とりにいく空間、キノコをとりにいく空間、イチゴをとりにいく空間、クリをひろいに行く空間など動植物の遊びの内容に応じてほぼ決まっていた。

虫やキノコとりは、山の中まで広がっていたが、イチゴや木の実等は林道に沿った空間に採集に行っていた。男子の遊び空間No.7と女子の遊び空間No.4は、地理的には同じ場所に位置するが、男子は虫とり、女子はクリひろいと遊びの内容に違いがみられた。この場所は、割木にするために15～20年周期で伐採していたクヌギやコナラや、柴として利用していた人の背丈ほどの若いクリからなる雑木林であったという。そのようなクヌギの蜜を好む虫は男子の遊び対象となり、クリの実等は女子の遊び対象となった。

「田」での遊びも男子は多様であり、刈り取りが終わった農閑期の田は、風揚げや野球の遊び空間として利用されていた。家のあるところから近く、見通しがよく一枚が広い田が好んで利用された。なお、夏に田にのぼってきたナマズなどの魚をとる遊びはとくに場所は決まっておらず、他所の家の田でもとってよかったという。

「湖・水路」といった水辺では、水路の湧水が湖に流れ込む場所が主要な遊び空間となった。「湖・水路」の女子と男子の遊び空間の位置はほぼ同じであったが、内容は、男子のほうが、水泳や貝とり、魚とりに加えて魚つりやザリガニとりなど遊びの種類が多様であった。

男女ともに守山集落の子ども全員が遊び空間として利用していた空間は、「山」では、男子のNo.6（虫とり）と女子のNo.3（キノコとり）であった。ここは、家のある場所と山が接する場所で、林道や水路が多く、アカマツ林・雑木林など多くの要素が

図－５ 昭和前期の女子の主な遊び空間の分布

ある空間であった。「湖・水路」では、男子のNo.14（水泳・魚とり・魚つり・貝とり）と女子のNo.10（湖・水路、水泳・貝とり・魚とり）であった。ここも多くの子どもたちの家から近い場所である上に、水路や船着場の入り江があるなど、やはり多くの要素がある空間であった。

（３）自然遊びと自然資源との関係

（い）遊び道具の種類

自然遊びと自然資源との関係を明らかにするために、遊ぶために用いた道具を、「採取したもの」「家にあったもの」「購入したもの」に分けて自然遊びの種類数との関係を示したものが図－６である。

「採取したもの」とは、遊ぶための道具として子どもが自分で

表－２ 昭和前期の男子の主な遊び（n=8）

NO.	遊び空間	主な遊び	人数
1	山	虫とり	6
2	山	キノコとり	8
3	山	木の実（イワナシ・ナツハゼ・ウスノキなど）とり、イチゴとり	6
4	山	コウモリ穴探検	8
5	山	アケビとり、クリひろい	4
6	山	虫とり	8
7	山	虫とり	6
8	山	イチゴとり	2
9	山	イチゴとり	3
10	山	ドングリ集め（シイ）	4
11	田	風揚げ、チャンバラ、飛行機とばし	2
12	田	野球、風あげ	3
13	湖、水路	水泳、貝とり、魚とり	5
14	湖、水路	水泳、魚とり、魚つり、貝とり	8
15	湖、水路	水泳、魚とり、貝とり、ザリガニとり	5
16	田、水路	ホタルとり、魚とり	4
17	川	魚とり	5

表－３ 昭和前期の女子の主な遊び（n=6）

NO.	遊び空間	主な遊び	人数
1	山	キノコとり	3
2	山	木の実とり（イワナシ・ナツハゼ・ウスノキなど）、クリひろい	3
3	山	キノコとり	6
4	山	クリひろい、イチゴとり	3
5	山	ドングリ集め（シイ）	3
6	山	イチゴとり、木の実とり（イワナシ・ナツハゼ・ウスノキなど）	2
7	田	ホタルとり	1
8	田	木の実とり（クワ）	1
9	湖、水路	水泳、魚とり	1
10	湖、水路	水泳、貝とり、魚とり	6
11	湖、水路	貝とり	2
12	田、水路	ホタルとり	2
13	川	魚とり	4

図-6 自然遊びの中で用いられた道具のタイプ (n=72)

図-7 自然遊びの道具として利用された自然資源の種類と割合 (n=57)

動植物を採取し、自分で遊ぶために加工したものである。ただし、「採集そのものの遊び」の対象として採集された動植物は含めない。「家にあったもの」とは、家にある藁縄や糸など本来は遊び以外のための材料のことである。「購入したもの」とは、凧やコマなど遊びのために店で購入したものである。ただし、凧揚げ、メンコ、紙飛行機とばしの3種類の遊びは購入したものと家にあった紙などを利用した手作りのものがあつたため、それぞれで2通りの遊びとしてカウントした。道具との関係を見るため、ここでの自然遊びの全種類数は72通りとした。

「採取したもの」を使った遊びは22種類、「採取したもの」と「家にあったもの」両方を使った遊びが14種類であった。つまり、72通りの遊びのうち自然資源を自分で採取し、加工した道具を

使っていた自然遊びが全自然遊びのうちの半数の36種類に及んだ。「家にあったもの」だけを利用した遊びは6種類、「購入したもの」での遊びは7種類と少なかった。

次に、動植物を採取して道具にした36種類の自然遊びにおいて、利用された自然資源の種類と割合を示したものが図-7である。道具として利用されていた自然資源は、竹が29.8%と一番多く、草本が28.1%、木本が22.8%、動物が10.5%、石が8.8%であった。木本や草本は、果実や花など遊びに応じて使う部分もさまざまだった。木本の果実は、例えば魚とりの道具としてエゴノキの実に含まれる毒を使ったり、彩のあるナンテンの実を小鳥とりの道具にしたりしていた。防風林の立木の状態は、木登りや隠れ家づくりに利用され、種をとった後のアブラナは藁状にしてホタルとりの道具として利用された。

特に割合の高かったモウソウチクやマダケなどの竹は、昭和前期の守山集落で刈り取った稲を干すための稲木、家の屋根材や壁材などとして日常生活の中でも多くの用途として使われていた。このような竹は、家の近くや田畑の近くに個人が所有している竹林から子どもたちが自分で採取してきた。子どもが遊びで使う竹は集落内のどの竹林で採取しても構わなかったという。

また、一つの遊びで多くの種類の自然資源を利用する遊びもあった。例えばコゲッチョと呼ばれる仕掛けを作った小鳥をとる遊びには、竹、石、立木、材という多様な自然資源が用いられており、複雑な加工過程を伴っていた。

(ii) 採集対象としての動植物

遊びの採集対象としての自然資源には、表-4に示すような動植物が挙げられた。山では、木本の果実や、キノコ類などの多様な植物、昆虫、鳥類といった動物が遊びを通じて採集されていた。例えば、林縁や林床に生える低木のナツハゼやイワナシなどのツツジ科の果実や、「ヤブイチゴ」と呼ばれたフユイチゴなどのキイチゴの仲間があげられた。これらの実は主に食べることを目的に採集された。

また、アカマツ林にはマツタケをはじめ多くの種類のキノコ類が生え、遊びを通して子どもたちも採集していた。キノコ類が生えた林の様子を聞き取った結果によると、アブラボンと呼ばれるキノコは若齢のアカマツ林に一面に出たといい、アカマツ林に天然のヒノキなどが混合した林には、クロカワ、ホンシメジ、キシメジなどが生えたという。

昆虫の中では、クワガタは特徴に応じて子どもたちの間で呼び分けられており、ノコギリクワガタは「ノコギリ」、コクワガタは「ベタ」、クワガタのメスは「アシトリメ(ン)」と呼ばれていた。魚類は、水路を利用して採集されることが多かった。採集した魚類は昭和15年頃の子どもは食べたというが、昭和30年頃の子どもは食べた経験がなかった。シジミやイナゴ、鳥類にも同じ傾向がみられた。

表-4 自然遊びの採集対象としての動植物

遊び空間	山	神社	庭	田	川	水路	湖
植物	木本 (果実)	クリ、ドングリ (ナラ類・カシ類)、アケビ、イハナシ (イワナシ)、ナツハゼ (ナツハゼ)、チョウセンクワ (ウスノギ)、コケモモ、キイチゴ類、クワ (マダケ)	ドングリ (シイ)				
	草本	イタドリ		イタドリ、スイト (スイバ)			
	キノコ類	クロカワ、シシタケ (コウタケ)、ヒラタケ、シメジ (ホンシメジ)、キシメジ、シイタケ、マツタケ、アブラボン※、カキタケ※					
	昆虫	カブトムシ、クワガタ (ミヤマクワガタ、ノコギリクワガタなど)、カナブン、セミ、スズメバチ		イナゴ、ホタル (ヘイケホタル)		ホタル (ヘイケホタル)	
動物	鳥類	ヤマバト、モズ、ヒヨドリ、ムクドリ、メジロ	ヤマバト、モズ、ヒヨドリ、ムクドリ、メジロ、スズメ				
	魚類			ドジョウ、ウナギ、コイ、ナマズ	ウナギ、アユ、アメノウオ (ビワマス)、コイ、ボテジャコ (タナゴ類)、ナマズ、ハエ (オイカワ)、ハス	ドジョウ、ウナギ、アユ、アメノウオ (ビワマス)、コイ、ボテジャコ (タナゴ類)、ナマズ、ハエ (オイカワ)、ハス	アユ、ボテジャコ (タナゴ類)、ハエ (オイカワ)
	その他				アメリカザリガニ		シジミ (セキシジミ)、ダブガイ (カラスガイ)、テナガエビ

() 標準和名、※標準和名が不明な種

4. 考察

本研究では、典型的な農村である守山集落の昭和前期における子どもの遊びを通して利用されていた空間や自然資源を明らかにした。その結果、子どもの遊びは72種類あり、そのうちの69種類が屋外空間や自然資源を利用した自然遊びであったことが明らかとなった。遊びの内容や空間の利用の仕方は、対象とした期間を通しては共通性が高く、世代間よりも男女間の違いの方が大きくみられた。

守山集落における子どもの遊び空間は、「山」「川」「水路」「湖」「道路」「神社」「運動場」「田」「庭」の9種類の要素に分類できた。特に、「山」「川」「湖」「田」は、動植物の遊びタイプに関連する遊び空間であり、このような空間は季節との関係も深かった。その中でも子どもたちが遊びを通じて利用していた空間は、クワガタなどの虫とりにいく空間、キノコをとりにいく空間など動植物の遊びの内容に応じてほぼ決まっていた。特に、全員が遊んだ経験がある空間は、「山」と「湖・水路」に一箇所ずつあった。それは、子どもたちの家から近い山辺と水辺に位置し、林道や水路、アカマツ林、雑木林、湧水の水路や船着場の入り江など、多くの要素が集まっている空間であった。集落の日常生活や生業での空間利用¹⁶⁾と比較してみても、このような子どもの自然遊びで好まれていた空間は、山から運び出した木材や石材を集積する空間や、割木や石材などの荷を積んだ船が出入りする空間に重なっていたことが分かる。

昭和初期の自然遊びは、集落の自然資源の利用と深く関連したものも多かった。例えば、男子の遊びである虫とりは、昭和前期の守山集落中心部の周辺に広がるクヌギ林で行われた。このようなクヌギ林は、柴や割木のような燃料として生活の中で利用され管理されていた林であった。さらに、同じ林でもクリは、頻繁に刈り取られ柴として利用・管理されていた。そしてそのような若齢のクリになる実は、女子のクリひろい遊びの対象となっていた。このように自然資源を利用した生活が子どもの自然遊びの多様さにもつながっていたものと考えられる。

集落の自然資源は、子どもの自然遊びの採集対象としてだけでなく、遊ぶための道具としても採取されていた。その種類も竹、草本、木本、動物、石があり、さらに木本や草本は、果実や花など遊びに応じて使う部分もさまざまであった。自然遊びの道具として一番利用されることの多かった竹は、昭和前期の日常生活の中でも多くの用途で利用されていた自然資源であった。そのような日常生活に根付いた自然資源が、やはり子どもの自然遊びの中でも利用されていたのである。また、その加工法は年上の人から教えてもらうことが多く、自然に様々な技術習得も兼ねていた。「山」などの家から離れた遊び空間には、最初は大人についていくことも多く、その中で地域の空間を認識していった。

このように、子どもの遊びを通して利用されていた空間や自然資源は、日常生活の資源利用に裏づけられたものであったと考えられる。今回、子どもの自然遊びに焦点をあてることで、日常生活や生業の中で使われていた有用な資源に焦点をあてるだけでは把握しきれない、かつての里山が担保していた昆虫や魚類、植物などの自然資源や空間の要素の多様性、そして自然との多様な関わり方とそのための技術を育む土壌としての実態を把握することができた。現在の守山集落での子どもの遊びをみると、室内やスポーツのクラブでの遊びがほとんどである。その一方で、集落の年配者や都市から移住してきた家族などを中心に地域の自然資源や空間を利用した遊びを見直し、里山活動に取り入れようとする動きがみられる。その際には、地域に根付いた形で遊びの中で利用されてきた空間や自然資源を里山での環境教育やレクリエーションなどのプログラムに取り入れて、里山の保全に生かしていくことが重要だと考えられる。

さらに具体的な里山の保全に結びつけるためには、昭和前期以降の守山集落の子どもの自然遊び自体の変化や、昭和前期に自然遊びで利用されていた自然資源や空間の現在の状態を量的・質的に明らかにすることが必要であり、今後の課題である。

謝辞：本研究を進める上で、聞き取り調査に応じてくださった守山集落の皆さまには多大な協力をいただいた。篤くお礼申し上げます。

引用文献

- 1) 仙田満 (1982)：原風景によるあそび空間の特性に関する研究—大人の記憶しているあそび空間の調査研究—：日本建築学会論文報告集 322, 108-117
- 2) 佐竹俊之・上甫木昭春 (2007)：人々が地域の水辺に対して抱く愛着に関する研究：ランドスケープ研究 70(5), 663-668
- 3) 山田善之・田畑貞寿 (1985)：世代間の自然要素に対する意識と遊びについて：造園雑誌 48(5), 276-281
- 4) 広脇淳・田畑貞寿 (1985)：地域特性からみた身近な象徴的自然空間の認識とその活用について：造園雑誌 48(5), 282-287
- 5) 菅麻記子・田畑貞寿 (1986)：子どもの自然遊びと緑地に関する研究：造園雑誌 49(5), 239-244
- 6) 大越美香・熊谷洋一・香川隆英・飯島博 (2003)：水辺における子どもの遊びの変遷と動植物に対する認識：ランドスケープ研究 66(5), 733-738
- 7) 大越美香・熊谷洋一・香川隆英 (2004)：里山における子ども時代の自然体験と動植物の認識：ランドスケープ研究 67(5), 647-652
- 8) 重根美香・渡辺敦子・香川隆英 (2005)：接触体験を通じた動植物の生息空間の認識に関する研究：ランドスケープ研究 68(5), 601-606
- 9) 浦山佳恵・富樫均・畑中健一郎 (2006)：語りからみた戦前の信州の里山の暮らし：長野県環境保全研究所研究プロジェクト成果報告 5, 83-88
- 10) 寺内雅晃・加我宏之・下村泰彦・増田昇 (2006)：昭和30年代における子どもの屋外遊びを支えていた環境条件に関する研究：ランドスケープ研究 69(5), 659-664
- 11) 梶木典子 (1998)：子どもの遊び環境に関する空間計画系研究の動向に関する考察—1986～1997—：人間文化研究科年報 14, 219-231
- 12) 木下勇 (1993)：三世代の聞き取りによる農村的自然の教育的機能とその変容—児童の遊びを通してみた農村的自然の教育的機能の諸相に関する研究—その2—日本建築学会計画系論文報告集 450, 83-92
- 13) 藤永豪 (2001)：山間地域における子どもの遊び空間の変容—長野県四賀村保福寺町地区の事例—：新地理 49(1), 1-18
- 14) 奥敬一 (2004)：里山と市民活動：森林科学 42, 24-30
- 15) 遊磨正秀・嘉田由紀子・藤岡康弘編 (1997)：水辺の遊びにみる生物相の時代変遷と意識変化—住民参加による三世代調査報告書—：琵琶湖博物館研究調査報告 9, 滋賀県立琵琶湖博物館
- 16) 堀内美緒・深町加津枝・奥敬一・森本幸裕 (2004)：滋賀県志賀町の2集落を事例とした1930年ごろの里山ランドスケープの空間構造と管理：ランドスケープ研究 67(5), 673-678
- 17) 志賀町史編集委員会 (2002)：志賀町史第三巻：滋賀県志賀町, 458pp